

# 31 深良用水開削の元締たち

～ 17世紀後半の町人請負新田の実態～

## 1 17世紀後半における新田開発—大開発の時代—

日本史上において17世紀は、大開発の時代ともいわれている。戦国時代以来の築城・鉱山技術の発展を基盤として、河川や湖沼を水源とする大規模用水路が各地につくられるなど、幕府や諸藩による耕地開発が盛んに行われ、17世紀後半になると、江戸周辺を中心に、江戸町人による町人請負新田が盛んに開発された。しかしながら中途において頓挫する事例が多く、1687（貞享4）年11月に、幕府は勘定組頭・代官の服務規程において町人請負新田の開発を禁止するに至った。このような関東における新田開発ブームの波は駿河東部にも及んだ。ここでは深良用水開削事業を事例として、この時期の新田開発の主体となった江戸の町人たちについて可能な限り明らかにしてみたい。

## 2 深良用水開削の元締=主体となった江戸町人—「湯山安右衛門日記」を中心に—

黄瀬川を挟んで深良村の対岸に位置する御宿村の「湯山安右衛門日記」には、御宿村内に住む甚左衛門という人物からの深良用水開削に関する聞き書きが掲載されている（史料1）。甚左衛門は、「箱根湖水番」を勤め、「箱根湖水掘抜の時分かせぎに入れ込み罷り有り」、すなわち用水番人で隧道工事にも従事した人物である。別の史料では「かねほり甚左衛門」として登場しており、鉱山技術者として深良用水の工事にかかわったことがわかる。聞き書きには、用水開削を請け負った人物を中心に、工事期間、上穀米（用水使用料）、畑成田（畑の水田化）などに関する記載がある。



〈写真1〉深良用水三百年記念碑

深良用水開削を請け負った人々は元締とよばれた。元締として名前があがっている人々には、元締頭として江戸浅草駒方横町の友野与右衛門、江戸大伝馬三丁目の須崎源右衛門（史料では橋本源右衛門と誤記）、金元として江戸霊岸島の浅井佐次右衛門（次郎右衛門）、小中間として橋本三入（山友）、江戸本舟町の天が崎（尼崎）加右衛門、伏見仁左衛門、江戸四谷の長浜半兵衛、御公儀請負人として須川（須賀屋）八郎兵衛、かざりや四郎五郎がいる。

このうち元締頭の友野らは、「御公儀様を相済まし候者也」とあるように幕府の認可を受けた事業の責任者であり、幕府との連絡役を担った。友野の出自は、かつて土木技術を持つことから駿府商人友野氏ともいわれたが、他にも諸説あって結論を得ていない。金元の浅井は、「諸入用まかない…惣堰々仕廻し…金子九千七百余両入…」とあって、出資者として事業にかかわる諸経費の出納に携わった存在である。また小中間の橋本、尼崎、伏見、長浜は、「少々宛金子出し合い…山に居り…諸事指図」（史料1）の〔後略〕の部分。以下の引用文は同じ）とあり、出資とともに現場において工事の監督にかかわった。さらに、公儀請負人

の須賀屋、かざりやの2人は「元メの後見くらい」とあり、事業のバックアップを担ったものと考えられる。また、須賀屋は江戸に居住している記載が見られないため、江戸町人ではない可能性が高い。

工事期間は、1666（寛文<sup>かんぶん</sup>6）年7月に着工し、1670年3月に完成した。完成直後には、現在の長泉町域の「日損地」に引水し、「下郷より上穀百九拾六俵余出し申候」とあり、公儀＝幕府によって用水による灌漑地域となった現在の裾野市・長泉町を中心とした御厨<sup>みくりやしもごう</sup>下郷村々から上穀米として用水管理料を徴収することを許可された。

### 3 深良用水開削の元締たち

「湯山安右衛門日記」からもわかるように、用水開削の主体となった元締の多くは、江戸町人であった。さらに調べていくと、彼らは冒頭でも触れた江戸周辺における開発ブームの申し子ともいえる存在であったことが明らかとなる。

友野与右衛門は、1674（延宝<sup>えんぼう</sup>2）年8月に武蔵国久良岐郡<sup>むさし くら</sup>の吉田新田<sup>よしだしんでん</sup>（横浜市）のうち1町2反を金25両で売却している。吉田新田は、1662（寛文<sup>かんぶん</sup>2）年に宮崎市兵衛<sup>みやざきいちべ</sup>という人物を中心に開発が始まった新田であるが、開発開始から10年を経ずに売却していることから、友野は開発地の売却益を目的に、吉田新田開発にかかわったものと推測される。

また、小中間の一人長浜半兵衛は、1670年に江戸浅草<sup>あさくさ</sup>田町<sup>たまち</sup>において武士屋敷を買収している。これも居住目的というより、むしろ賃貸収入などを目的とした買収と考えられる。

当時の経済情勢は、幕府の財政支出の増大や物価上昇からも類推できるように、市中の貨幣流通量が増大し、これが投機ブームにつながっていく素地は十分に存在し

ていた。実際に、深良用水開削と同じく江戸町人が請け負い、1673年に完成した下総<sup>しもうさ</sup>の椿海<sup>つばきのうみ</sup>干拓事業では、請け負った江戸町人たちが出資した背景として、米穀や土地に対する投機的な利益追求のあったことが指摘されている。すなわち、①新田開発を通じて町人たちがより直接的に米穀生産に関与することにより、投機的米穀販売による利益をより確実なものにしようとしたこと、②造成された新田地を江戸住民に分売することによる利益をめざしたこと、である。

椿海干拓への出資に江戸町人たちを突き動かしたものが、米穀や土地への投機による利益だとすると、同様に友野与右衛門らを深良用水開削へと駆り立てたものも米穀や土地の売却益とみることができる。「畑成田」から用水管理料として徴収した上穀米と、ここで得られた米穀を市場において売却した利益こそが、友野らの目的であったと考えられるのである。

〔史料1〕「湯山安右衛門日記」  
 （宝永五年四月）四日 庚戌 雨天 半右衛門殿前地に居り申し候  
 箱根湖水番仕り候甚左衛門、是は箱根湖水掘抜の時分かせぎに入れ  
 込み罷り有り候間、様体能く存じ候に付、物語り承り書き付け申し  
 候、  
 湖掘抜元メの覚  
 江戸浅草駒方横町 友野与右衛門 是は御公儀様を相済まし候者也  
 大伝馬三丁目 橋本源右衛門 右同断  
 メ式人元メ頭  
 金元  
 れいがん嶋 浅井佐次右衛門 是は掘抜諸入用まかない致し、惣  
 堰々仕廻し候て金子九千七百余両入れ申し候由  
 〔後略〕  
 〔裾野市史〕第六卷 116頁

〔参考文献〕

『裾野市史』第八卷通史編Ⅰ 第3編第1章第3節